

鳥取県倉吉市の旧市街地の東側には、赤瓦に白壁、黒い焼杉の腰板のコントラストが美しい白壁土蔵群や商家の町並みが続き、蔵や古民家を改装したギャラリーやカフェに利用されています。その西側にあたる明倫地区は、かつて商人と職人の街で、街道沿いの商家（倉吉淀屋・豊田家住宅）、暮らしに欠かせない水路（玉川）、農機具などをつくる鍛冶屋などが城下町の面影を残しています。

旧明倫小学校の校舎は、建築家坂本鹿名夫さかもと かのぶの設計（昭和30年築）によるものです。坂本は円形校舎にこだわり、その経済性・合理性を主張しました。昭和30年前後に建てられた円形校舎は、全国で100棟以上ありましたが、現在残っている校舎は少なく、その中で旧明倫小学校は最も古いものです。

同校舎は鉄筋コンクリート4階建てで、延べ床面積は約1515㎡。戦後のベビーブームによる児童数の増加で、学校の施設は不足しており、これに対応するための建築が円形校舎でした。校舎の中心部にらせん階段が通り、中心部の黒板から外側に向って広がる扇形の教室は、背後から採光がとれるという利点がある反面、高度成長期に激増する児童数に対応するための増築が困難だという難点もあって、30年代後半からは建設されなくなりました。

同校の新校舎完成により、昭和52年（1977）から円形校舎は公民館や倉吉ふれあい会館として使用されていましたが、老朽化や耐震強度の不足から平成18年（2006）に閉鎖されました。役割を終えて10年、割れた窓ガラスやくすんだ外観に解体が決定されましたが、町のシンボリック存在の校舎解体を惜しむ保存運動により7000名の署名が集まりました。この思いを受けて地元有志が立ち上がり、円形校舎の保存にとどまらず、倉吉に工場を持つフィギュア製作会社などの協力のもとで、フィギュアの一大展示施設構想が生まれたのです。市から無償譲渡を受けたミュージアムの運営主体は、国の補助をうけて耐震補強やエレベーター、エントランスの新設などを実施し、平成30年（2018）4月7日、数千点のフィギュアの展示とともにフィギュアに触れ、色づけができる「円形劇場くらしフィギュアミュージアム」がオープンしました。

一時は解体が決まった円形校舎が住民らによる保存運動で、フィギュアの殿堂としてよみがえったことで、文化財的な価値とともに耐震性も高く、建物の歴史的価値を尊重した補強・修復工事が施されていることなどが評価され、「DOCOMOMO JAPAN」^{※1}から「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」^{※2}に選定されました。



恐竜、キャラクター、日本文化などジャンルごとに仕分けされた展示室

※1：近代建築の記録と保存を目的とする学術組織で、国際組織の日本支部

※2：20世紀の建築の主要な潮流の一つで、線や面の構成が美しい建築が多数生まれている

■位置図



中央部のらせん階段



円形校舎の教室を再現したコーナー



旧明倫小学校の円形校舎「円形劇場くらしフィギュアミュージアム」
フィギュアやキャラクターグッズのミュージアムとして活用されている